

キャンパス福音の交わり(3)

アブストラクト(重点を抽出すること)と負担:

福音を宣べ伝えることにおいて、主の中での喜びを維持することが重要です。ピリピに在る召会はパウロと福音を前進させる交わりにあずかっていました。このような召会に対して、パウロはすべての章で主の中で喜ぶように彼らに命じました。主の中で喜びを維持する生活は、自分の要望を神に知らせて、平安の神に心と思考を護衛していただき、思い煩わない生活です。コロナウイルスの青白い馬が走る時、福音の白い馬を加速させるべきです。このために私たちは心配事を神に委ね、平安の神に心と思考を護衛していただき、主の中での喜びを維持する必要があります。コロナウイルス拡散のニュースを聞くたび、ウイルス拡散が止まるように祈ると同時に、喜びを維持し、福音の霊を燃やし、福音を実行することが重要です。これが召会の兄弟姉妹の重要な責務です。

ピリピ 4:4~9、11~13

4:4 主の中でいつも喜びなさい。私は繰り返して言います。喜びなさい。

5 あなたがたの謙虚溫柔さを、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。

6 何事にも思い煩うことなく、あらゆることにおいて、感謝をささげることを伴う祈りと願い求めによって、あなたがたの要望を神に知らせなさい。

7 そうすれば、人知をはるかに超えた神の平安が、あなたがたの心と思考を、キリスト・イエスの中で護衛してくださいます。

8 最後に、兄弟たちよ、何であれ真実なこと、何であれ誉れあること、何であれ義なること、何であれ純粋なこと、何であれ愛らしいこと、何であれ好評なこと、またもし何らかの徳があり、何らかの称賛があるなら、これらのことを考慮しなさい。

9 またあなたがたが、私にあって学び、受け、聞き、見てきた事柄、これらの事柄を実行しなさい。そうすれば、平安の神はあなたがたと共にいてくださいます。

11 私は乏しいから言うものではありません。というのは、私はどんな境遇でも、満ち足りることを学んだからです。

12 私は卑しくなる道を知り、また豊かになる道も知っています。あらゆる事において、またいっさいの事柄において、私は飽くことにも飢えることにも、豊かであることにも乏しくあることにも、秘訣を学びました。

13 私は、私を力づけてくださる方の中で、いっさいの事柄を行なうことができるのです。

フットノート

4 節「主の中で喜びなさい」: 喜ぶことは、2 節と 3 節で語られた一のために、力を私たちに与えます。さらに、主の中で喜ぶことは、5 節から 9 節に挙げられた、卓越した徳を持つ秘訣です。

4 節「謙虚溫柔さ」: すなわち、理にかなったこと、思いやり、人を取り扱うことでの願みであり、法的な権利の要求において厳格ではないことです。それは、自己の野心や虚栄、つぶやきや議論と対照的です。それは、信者たちから生かし出された卓越した徳としての、キリストご自身です。

4 節「主は近いのです」: 空間と時間において近い。

空間的には、主は私たちに近く、すぐにも助けてくださいます。時間的には、主は近く、間もなく来られます。

6 節「思い煩う」: すなわち、心配する。思い煩いはサタンから来ますが、人の生活の総合計であって、信者がキリストを生きる生活を妨げます。謙虚溫柔は神から来ますが、キリストを生きる生活の総合計です。これらは相反します。

6 節「祈り」: 祈りは一般的なものであり、それは礼拝と交わりの要素を含んでいます。願いは特別なものであり、特定の必要のためです。

6 節「感謝をささげることを伴う」: 「そして」ではなく、「伴う」です。私たちの祈りと願いには、主に感謝をささげることが伴うべきです。

6 節「神に知らせなさい」: ギリシャ語はしばしば、「と共に」と訳されます。それは、ある方向の動作を示し、生ける結合と交流の意味であり、交わりを暗示します。ですから、ここの「神に」の意味は、「神との交わりの中で」ということです。

7 節「神の平安」: 祈りの中で神と交わりを実行した結果は、神の平安を享受することです。神の平安は實際上、平安としての神であり、私たちが祈りによって彼と交わることを通して、悩みの均衡を取る重り、思い煩いの解毒剤として、私たちの中へと注入されます。

7 節「心と思考」: 心は源であり、思考はその結果です。

7 節「護衛する」: あるいは、歩哨に立つ。平安の神は、キリストにある私たちの心と思考の前を巡回して、私たちが落ち着かせ、静めてくださいます。

8 節「徳があり」: 「卓越」を意味します。すなわち力強い行動の中で表明された倫理的なエネルギーです。

9 節「実行しなさい」: 信者たちは、8 節に述べられた事柄を考えるだけでなく、使徒の中で学び、受け、聞き、見た事柄を、実行すべきです。

9 節「平安の神」: 平安の神は、8 節と 9 節に述べられたすべての事柄の源です。彼と交わり、彼に私たちが共にいていただくことによって、これらすべての徳は、私たちの生活の中で生み出されるでしょう。

12 節「学びました」: 文字どおりには、入門した。この比喩は、人が秘密結社に入門して、基本原則を教えられることを言います。パウロはキリストに回心した後、キリストとキリストのからだの中に入りました。そして、どのようにキリストを命とし、キリストを生き、キリストを大きく表現し、キリストを獲得し、召会生活を持つかの秘訣を学びました。これらすべては、基本原則です。

13 節「力づけてくださる方」: パウロはキリストにある人でした。そして、キリストの中に見いだされることを願っていました。今や彼は、自分を力づけてくださるキリストの中でいっさいの事柄を行なうことができる、と宣言しました。これは、彼のキリスト経験についての、すべてを含む、結論の言葉です。それは、私たちと主との有機的関係についての主の言葉、「あなたがたは私を離れては何をすることもできない」の裏返しです。

13 節「力づけて」: ギリシャ語は、「内側で活動的にさせる」を意味します。キリストは、私たちの中に住まわれます。彼は外側からではなく内側から、私たちが力づけ、活動的にさせます。そのように、内側で力づけられることによって、パウロはキリストの中で、いっさいの事柄を行なうことができました。